

# ターゲット探索時の 情報探索方略

田中俊也  
名古屋大学 教育学部

## 目的

ターゲット探索は、通常、既知のターゲットの諸特徴を、実際の刺激布置の中から選んだ刺激で再認する過程だと考えられている。しかしながら、比較的単純な刺激布置を持つ課題においては、再認(ターゲットに注視点と停留させた後反応キーを押す: FT方略)より効率の良い、消去法的方略(F $\bar{T}$ 方略)も可能である。

本研究は、「ターゲットを発見する」という構文の下での、消去法的探索方略の存在を確認することを目的とする。

## 方法

- (1). 被験者: 大学生男女計8名(全試行正解)
- (2). 材料及び器具・装置: 3, 6, 8, 9のレタリング文字を、プロジェクターでスクリーンの4隅にカウンターバランスして呈示。反応は、呈示刺激の位置に対応した4つのキーを持つキーボックス(同時にスライド進行、イベントレコーダーへの記録が行われる)で行なわれた。眼球運動は、スクリーン中央の穴から望遠レンズでVTRに両眼を直結撮影。

## 結果・考察

### (1). 反応時間

反応キー on の後、次のスライドが呈示されるまでの blank は、平均0.9secであった。従って、nkey-mkey間の時間から0.9sec引いた値をRTとした。被験者 $\times$ 試行回数 $\times$ 分散分析の結果、被験者( $F=5.193$   $df=7/12$ ), 試行回数( $F=5.538$   $df=19/12$ )のどちらの効果も有意( $P<.01$ )であった。

### (2). 反応時間と探索方略

各被験者について、平均反応時間(MRT $_i$ )、標準偏差( $\sigma_i$ )をとり、 $RT \geq MRT_i + 0.43\sigma_i$ の試行をLRT、 $RT \leq MRT_i - 0.43\sigma_i$ をSRT、その中間をMRTとし、全被験者の全試行を探索方略に従って分類した。 $\chi^2$ 検定の結果、反応時間の長さによって、FT方略とF $\bar{T}$ 方略のあらわれ方が異なっており( $\chi^2=8.545$   $df=2$   $P<.025$ )、SRTではF $\bar{T}$ 方略が、MRT、LRTではFT方略が多く現われた。

以上の結果より、短い反応時間で正解する際には、消去法的方略が顕著に出現することが確認された。